

ガリバー旅行記 ジョナサン・スイフト

訳 原 民喜

第一、小人国（リリパット）

1 大騒動

私はいろいろ不思議な国を旅行して、さまざまの珍しいことを見てきた者です。名前はレミュエル・ガリバーと申します。

子供のときから、船に乗つて外国へ行つてみたいと思っていたので、航海術や、数学や、医学などを勉強しました。外国语の勉強も、私は大へん得意でした。

一六九九年の五月、私は『かもしか号』に乗つて、イギリスの港から出帆しました。しゅつぱん 船が東インドに向う頃から、海が荒れだし、船員たちは大そ

う弱っていました。

十一月五日のことです。ひどい霧の中を、船は進んでいました。その霧のために、大きな岩が、すぐ目の前に現れてくるまで、気がつかなかつたのです。

あッという間に、岩に衝突、船は真二つになりました。それでも、六人だけはボートに乗り移ることができました。私たちは、くたくたに疲れて

いたので、ボートを漕ぐ力もなくなり、ただ海上をただよっていました。と急に吹いて来た北風が、いきなり、ボートをひっくりかえしてしまいました。で、それきり、仲間の運命はどうなつたのか、わかりませんでした。

ただ、私はひとり夢中で、泳ぎつけました。何度も何度も、試しに足を下げてみましたが、とても海底にはとどきません。嵐はようやく静まつてきましたが、私はもう泳ぐ力もなくなつていま

した。そして私の足は、今ひとりでに海底にとどきました。

ふと氣がつくと、背が立つのです。「のときほ
ど、うれしかった」とはありません。そこから一
マイルばかり歩いて、私は岸にたどりつけることができました。

私が陸おかに上つたのは、かれこれ夜の八時頃でした。あたりには、家も人も見あたりません。いや、とにかく、ひどく疲れていたので、私は睡ねむいばつかしでした。草の上に横になつたかとおもうと、たちまち、何もかもわからなくなりました。ほんとに、「このときほどよく眠つたことは、生れてから今まで、一度もなかつた」とです。

ほつと田たがさぬると、もう夜明けらしく、空が明るんでいました。さて起きようかな、と思い、身動きしようとするが、どうしたとか、身体からだがさっぱり動きません。気がつくと、私の身体からだは、

手も足も、細い紐で地面に、しつかりくくりつけ
てあるのです。髪の毛までもくくりつけであります。
これでは、私はただ、仰向けになつているほかは
ありません。

日はだんだん暑くなり、それが眼にギラギラし
ます。まわりに、何かガヤガヤという騒ぎが聞え
てきましたが、しばらくすると、私の足の上を、

何か生物が、ゴソゴソ這つているようです。その
は

生物は、私の胸の上を通つて、頸あごのところまでや
つて来ました。

私はそつと、下目を使ってそれを眺めると、な
んと、それは人間なのです。身長六インチもない
小人が、弓矢を手にして、私の顎のところに立つ
ているのです。そのあとにつづいて、四十人あま
りの小人が、今ぞろぞろ歩いて来ます。いや、驚
いたの驚かなかつたの、私はいきなり、ワツと大

声を立てたものです。

※テキストは、インターネット上の図書館「青空文庫」をもとにして加工しました。